POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」

第 ６３号　2008. 6. 20

発行
北海道ポーランド文化協会
〒011-0029
札幌市北区北29条西12丁目2－16
佐光伸一
電話・FAX　011-727-1520

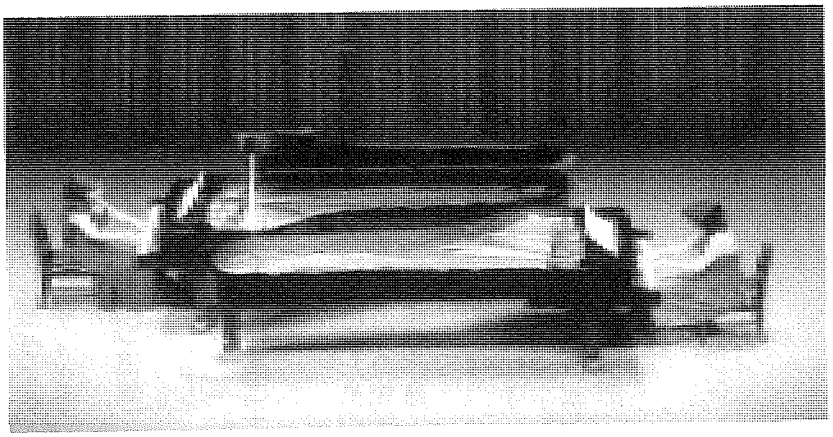
コンサートを成功裡に終えて

二十周年記念演奏会実行委員会総務　薄井豊美

北海道ポーランド文化協会創立二十周年記念演奏会の準備は、演奏会実行委員会を設けて昨年まだ雪深い頃に始まりました。音楽関係の会員の皆様が出演を御快諾下さり、準備は順調に運びました。

薫風爽やかな五月十七日、三六五名のお客様を迎えた本番は真摯な熱演が続き、ディバワ御夫妻の詩の朗読の際、同時通訳が欲しかった、との御意見をお客様から頂き反省点となりましたものの、充実した良い演奏会になりました。これも偏に佐光事務局長、運営委員の皆様、その他御関係の皆々様のお力添えの賜物です。本当に有難うございました。特に会場確保から事務的仕事まで一切を引き受けて下さいました小林様、チラシデザインから印刷屋との価格交渉、会計全般を担当して下さった高島様には心から御礼申し上げます。

この度の演奏会を機会に、定期的な演奏会開催を模索しています。今後共変わらぬ御協力を宜しくお願い申し上げます。



創立二〇周年記念ピアノコンサート開催

二〇〇八年五月十七日、当協会の創立二十周年を記念しピアノコンサートを札幌コンサートホールキタラ小ホールにて開催いたしました。

コンサートでは「ショパンからパツェヴィチ」までと題し、フレデリック・ショパン、モーリッツ・モシュコフスキ、カロル・シマノフスキ、アクレサンデル・タンスマン、グラジナ・パツェヴィチというポーランドの5人の作曲家を取り上げ、当協会の会員を中心に十四名のピアニストが演奏を行いました。また

たコンサートでは、アダム・ミツキエヴィチ、ツィプリアン・ノルヴィトという十九世紀ポーランドを代表する詩人によるショパンゆかりの詩二編を、在札幌のポーランド人が朗読しました。

当日は三六五名ものお客様を向かえ、コンサートは大成功に終わりました。以下、当日のプログラムを掲載しておきます。また当日プログラムと一緒に配布されました三浦洋さんによるプログラムノートも合わせてお楽しみください。

Program

I

・ショパン「ノクターン作品十五の二」、「ワルツ作品三十四の三」 小林美保

・ショパン「ノクターン作品二十七の二」 ウィリアムス美由紀

・ショパン「プレリュード作品四十五」、「ワルツ作品六十四の二」 片寄ますみ

・ショパン「アンプロムプチュ作品五十二」、「ポロネーズ作品四十の一『軍隊』」 安藤むつみ

・ショパン「コントルダンス」、「ワルツ作品七十の二」、「ワルツ作品六十九の一『告別』」 渡辺卓

・ショパン「変奏曲」 塚原恵美子(P)・塚原邦夫(S)

詩の朗読

・「コンラート・ヴァーレンロット」(第四章「祝宴」の「詩人の歌」より) アダム・ミツキエヴィチ作 朗読 パヴェウ・ディヴァワ

・「フレデリク・ショパン追悼」 ツィプリアン・カミル・ノルヴィト作 朗読ヨアンナ・ディヴァワ

・ショパン「バラード作品二十三」 水田香

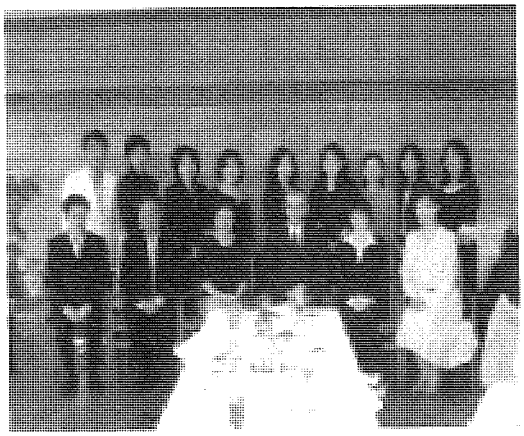
II

・パツェヴィチ「子供のための組曲」、「スケルツォ」 田口綾子

・シマノフスキ「変奏曲作品三」 高橋健一郎

・モシュコフスキ「カプリス」、「マズルカ」 高島真知子(1P)・薄井豊美(2P)

・タンスマン「ヨハン・シュトラウスのワルツによる幻想曲」 名取百合子(1P)・横路朋子(2P)



プログラムノート

三浦　洋

ショパンからバツェヴィチまで

本日の一六曲は、どれもがポーランド出身の音楽家による作品です。一八一〇年生まれのショパンから一九〇九年生まれのバツェヴィチまで、ほぼ百年にわたるポーランド音楽史がピアノの響きで紡がれます。また、ショパンゆかりの詩も朗読しますので、ポーランド語の響きに耳を傾けてみてください。２つの響きから、ポーランドならではの詩と音楽の出会いを感じ取って頂けるにちがいありません。

ショパンの作品

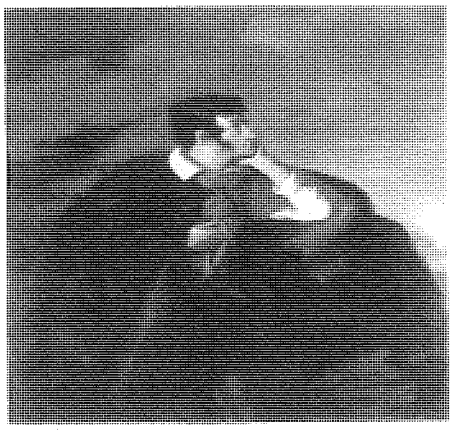
ショパンのノクターンOp. 15-2とOp. 27-2は、どちらもゆったりとした曲ですが、長調の明るさと短調のほの暗さが対照的で、それぞれに作曲家の心象風景が浮かんできます。ノクターンと同様、ワルツも生涯にわたって作曲されました。四曲のうち、一八三五年に作られたOp. 69-1「告別」は繊細な曲想ですが、一八四七年作曲のOp. 64-2は晩年の作品らしく風格があります。Op. 70-2、Op. 34-3も個性的な響きを持ち、ショパン独特のワルツの多彩な表情にあふれています。

変奏曲（4手で演奏）とコントルダンスは、ポーランドで作曲法を学んでいた頃の貴重な作品です。一方、成熟期に書かれた単独のプレリュードOp. 45は異彩を放つ楽曲。ベートーヴェン記念碑建立の際、募金のためショパンが供出した作品であることから、「月光」ソナタと同じ嬰ハ短調が想像力をかきたてます。アンプロンプチュOp. 51もやはり成熟期の作品で、陽気さと陰りが交錯する曲想の中に、はっとするような美しい表情が現われます。そして、気位の高い「軍隊」ポロネーズOp. 40-1。ポーランドの「第2の国歌」と呼ばれる音楽から、誇り高いポーランド人の心意気が聞こえてきます。

バラードOp. 23は、音楽史上初めて器楽曲として作られたバラードです。序奏で独特の雰囲気をかもし出すナポリの和音が聴き手を物語の世界に誘い、やがて3拍子系のリズムが物語を紡いでいきます。ピアノの天才ショパンがおよそ5年を費やして完成させたこのバラードは、ピアノ音楽の名曲中の名曲といってよいでしょう。

ミツキェヴィチとノルヴィトの詩

アダム・ミツキェヴィチ（一七八九―一八五五）は近代ポーランドを代表する大詩人。ワルシャワ音楽院で学びながら大学で文学史の講義を受けていたショパンは、十代の頃にミツキェヴィチのバラード（譚詩）を読んだようです。そこからインスピレーションを受け、器楽曲としてのバラードを創造したわけですが、残念ながら、ショパンがミツキェヴィチのどのバラードから影響を受けたかはわかりません。ただ、この「コンラート・ヴァーレンロット」は有力な候補と考えられています。本日朗読するテキストの一節は、ワルシャワのワジェンキ公園にあるショパン像の台座にも刻まれているものです。



ツィプリアン・カミル・ノルヴィト（一八二一―八三）は現代になって高く評価されるようになった詩人で、ポーランド映画「灰とダイヤモンド」に登場する詩でも知られます。ノルヴィトはパリで病床にあったショパンを見舞い、ショパンが亡くなった翌日、ポーランド語の新聞に追悼文を発表しました。「珠玉の名文といわれるこの文章は、ただ言葉が美しいだけでなく、祖国を思って生きた音楽家の姿をポーランドの人々に伝えようとする強い意志を感じさせます。

ショパン以後の作曲家たち

ポーランドの現代作曲家の中には、ショパンと同じようにパリで暮らした人が少なくありません。女流作曲家グラジナ・バツェヴィチ（一九〇九―六九）はパリ留学時代に「子どものための組曲」を書き上げました。モーリツツ・モシュコフスキ（一八五四―一九二五）はブレスラウ（ブロツワフ）で生まれパリで没した人ですが、「マズルカ」と名のつく作品を残したところにポーランド音楽への愛着が感じられます。

カロル・シマノフスキ（一八八二―一九三七）、アレクサンデル・タンスマン（一八九七―一九八六）は、ピアノ音楽に限らず多くの音楽ジャンルに作品を残した大作曲家です。シマノフスキの変奏曲とタンスマンの幻想曲は、ともに特徴的な主題を展開した作品ですが、いずれも非凡なエスプリにあふれています。

「コンラート・ヴァーレンロット」第4章「祝宴」の「詩人の歌」より

ああ、民衆の伝承よ、おまえは
契約の箱*。
古の時代と近しい時代を結ぶ
おまえの中に民衆は収める、騎士の武具を、
思考の紡ぎ糸を、感覚の花々を。

契約の箱よ、おまえはどんなに
打たれても壊されはしない、
おまえの民衆がおまえを侮らない
いうちは！
ああ、民衆の歌よ、おまえは守
りに立つ
記憶という、民衆の教会の。
大天使の翼と声を備え、
いざというとき、おまえは大天
使の剣を手に身構える。

歴史の絵巻は炎に砕かれ、
宝物は略奪者の剣に根こそぎ奪
われる。
だが、歌は無傷で逃れ去る、群
衆の間を駆け巡って。
もし歌が、卑しい魂に
悔みという糧を給し、望みとい
う水を飲ませられないなら、
歌は上空へ逃げ、瓦礫にとどま
る。
そして、そこから古の時代を物
語る。
ナイチンゲールだって、炎にの
まれた建物からは
飛び出し、屋根にしばしとま
る。
屋根が崩れ落ちるとき、鳥は森
へ逃げ去る。
そして胸を響かせながら、焼け
跡や墓地の空に向かい、
追悼の歌を歌う、道行く人々に
届くようにと。

アダム・ミツキェヴィチ
*モーゼが神の「十戒」を収めた箱。
［三浦洋・訳］

フリデリク・ショパン追悼

生まれにおいてはワルシャワ人、心においてはポーランド人、だが才能においては世界市民であったフリデリク・ショパンがこの世を去った。胸の病が、三十九歳の芸術家に早すぎる死をもたらしたのである。今月一七日のことであった。

彼は、芸術の至難な課題を妙なる技量によって解きえた。というのも、野の花々を、露のひとしずく、にこ毛のひとつとて散らさずに摘むことができたのだから。そして、それらを理想の芸術によって輝かせ、ヨーロッパ中を照らしだす星、流星、彗星にさえも変えることができたのである。

野に散ったポーランドの民の涙は精妙なる和音の結晶となって、人類の宝冠のうちなる美のダイヤモンドへより集まった。

これこそ、芸術家が為し得る最大のこと、それを為したのがフリデリク・ショパンである。

彼はほとんど全生涯を(つまり生涯最高の時期を)、祖国の外で、祖国のために生きた。

これこそ、祖国を離れた者が果たし得る最大のこと、それを果たしたのがフリデリク・ショパンである。

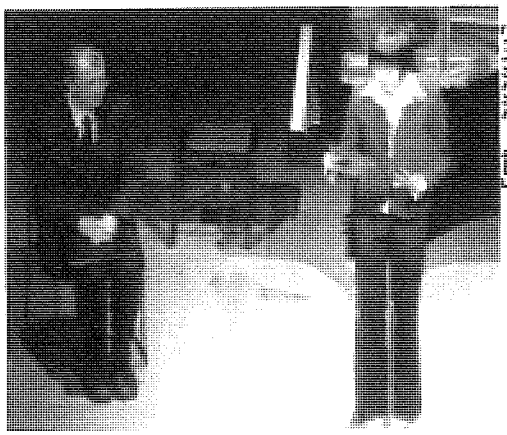
彼は普遍的に存在する。というのも、賢明にも魂の祖国に居住まっていたから。そして、祖国に居たのでもある。というのも、普遍的に存在しているから。かつてコハノフスキ*はこう訴えた。

「高名なアテネの音楽家ティモテオスは、自分の楽器に一本の弦をかたくなに用いた。けれども、我々の時代にあっては、竪琴には一本でなく九本の弦を張る。今日の歌が「神の御母」からかなり遠いものになっているのは、習俗が「憲章」の時代から遠いものになっているのと同様である。音楽におけるそのような変化が、共和国にも変化をもたらしているのである」

コハノフスキは「夏至祭」において民族の詩を初めて知的世界に知らしめたが、音楽においてはショパンもまたそれを為したのである。

一八四九年一〇月十八日パリ
ツィプリアン・カミル・ノルヴィト

*ポーランドの詩人、ヤン・コハノフスキ(1530-84)。
［三浦洋・訳］



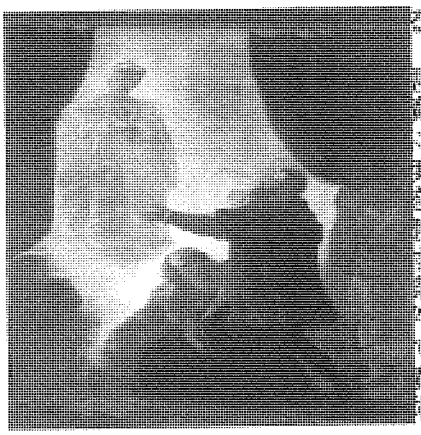
ベラルーシの歴史と伝説（二）

越野剛

このシリーズではリトアニアの名門貴族ラジヴィル家にまつわる様々な逸話を紹介していきたい。中世のリトアニア大公国は現在のベラルーシをあわせた大国であり、隣のポーランドと連合王国のかたちをとっていた。そのためラジヴィル家の歴史はベラルーシ・リトアニア・ポーランドの三つの地域にまたがるものとなっている。ベラルーシのちょうど真ん中あたりにニェスヴィシュという小さな町があるが、そこにはユネスコの世界遺産にも指定されている古い城館がある。今でこそニェスヴィシュはのどかなベラルーシの地方都市にすぎないが、かつてここはラジヴィル家の居城だったところだ。バロック風の城館の周りには英国式の庭園が広がっており、観光客はのんびりと散策を楽しむことができる。しかしこの場所には夜な夜な「黒い貴婦人」と呼ばれる幽霊がさまようという言い伝えがある。今回はそんなニェスヴィシュの幽霊にまつわるエピソードを紹介しよう。

十六世紀の中ごろ、ニェスヴィシュのラジヴィル家は「黒ひげ」のミコライと「赤ひげ」のミコライとあだ名された従兄弟たちの活躍によって、リトアニア大公国で最も有力な貴族となっていた。赤ひげのミコライにはバルバラという美しい妹がいて、またまポーランド王の息子ジグムントによって見初められた。バルバラはリトアニアの首都ヴィリニュスに住んでいたが、やがて彼女の屋敷には夜ごと王子が足しげく通うようになる。噂を聞いてニェスヴィシュからやってきた両ミコライは一計を案じて、ジグムントが忍んできたところを待伏せして、その場で王子がバルバラと結婚することを強要した。あらかじめ司祭や証人を用意するほどの周到さであった。ラジヴィル一門の娘の名誉が傷つくことを怖れたこともあるだろうが、ポーランド王家との縁戚関係を得る絶好の機会をとらえたと見ることもできる。すでにラジヴィル家の美女に魅了されていたジグムント王子は、結婚の事実を秘しておくことを条件にして両ミコライの要求を受け入れた。

やがて一五四八年に父王のジグムント一世が死去する。王子がジグムント二世として後を継ぐことになり、バルバラ・ラジヴィルとの結婚を隠しておくわけにはいかなくなった。議会（セイム）は王族でもないリトアニア貴族の娘を王妃として認めることをしぶった。ポーランドでは、王様に対して貴族の力が強かったことで知られている。母のボナ・スフォルツァ王妃も息子の結婚に反対の意思表示をするため、実家のイタリアに里帰りしてしまった。プロテスタントを信奉していたラジヴィル家に対して、カトリックの立場からの敵意もあったようだ。それでもジグムント二世はなんとか貴族たちを説得して、一五五〇年にはバルバラは新王妃として無事に公認された。ところが喜ぶ間もなく最愛の妻は病に倒れ、翌年にはあっけなく死んでしまう。彼女を憎んだ王母ボナの手先によって毒殺されたとも伝えられている。彼女の遺骸はポーランドの当時の首都クラクフではなく、リトアニアのヴィリニュスに移して葬られた。



この先の話は伝説にすぎないのだが、悲嘆に暮れる王は黒魔術によってバルバラの霊を呼び出すことを考えたという。そこで登場するのが有名な魔法使いパン・トヴァルドフスキである。悪魔に魂を売り手先で魔術の知識を得たトヴァルドフスキはいわばファウスト博士のポーランド版である。悪魔の手を逃れて月に移り住んだ話は、絵本などで今の子供たちにもよく知られている。トヴァルドフスキは国王に頼まれて、バルバラ・ラジヴィルの故郷であるニェスヴィシュの城館で死者の霊を召還する儀礼を行った。ジグムント二世は美しい妻の面影が薄闇の中に浮かび上がるのを見ると、身動きしないよう警告されていたにも関わらず我慢できずに立ち上がって亡霊を抱きしめようとした。そのときからバルバラは死者の国に帰ることができなくなり、ラジヴィル家の城館と庭園を永遠にさまよい続けることになった。ニェスヴィシュで開かれる舞踏会の席にあまりにも派手な格好をした女性がいると、バルバラの亡霊が現れて警告したという。いつしか彼女は「黒い貴婦人」と呼ばれるようになり、戦争や災厄を予兆するものとされるようになった。第二次世界大戦でベラルーシを占領したドイツ兵も、ニェスヴィシュで「黒い貴婦人」の幽霊を目撃したという。ジグムント二世とバルバラ・ラジヴィルの悲恋の物語は、ポーランド・リトアニア・ベラルーシのそれぞれでよく記憶されており、小説や戯曲や映画の題材にされている。

ポーランドの道産子

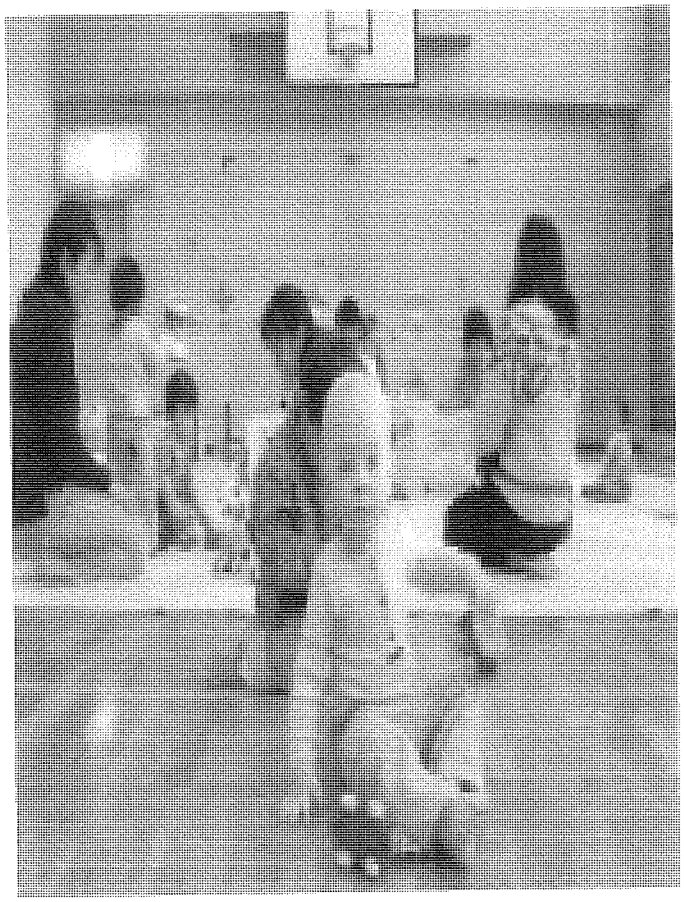
エディータ・ジェプカ

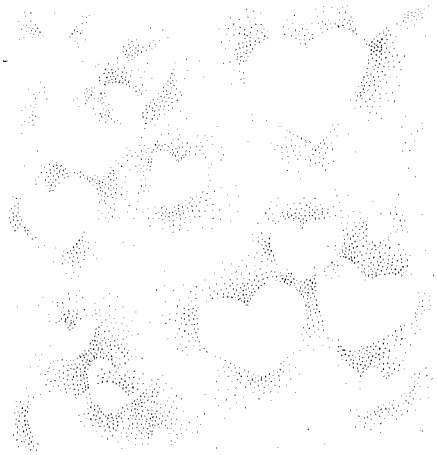
ポーランドでは公園住宅地の子供たちは、ほとんどが専用の遊び場を持っています。そこに住む人たちは、ご近所さんとの交流を楽しむのが日課です。子供たちは、滑り台やブランコなどの遊具を使って、仲良く遊んでいます。

ある日、私の子供が近所の子供たちと一緒に公園に出かけました。すると、そこにたくさんの子供たちが集まっていました。子供たちは、みんなで楽しそうに遊んでいました。私の子供は、初めてのポーランド公園デビューということで、少しばかりとまどっていました。しばらくすると、子供たちは、お互いに話をしはじめました。私の子供は、ポーランド語を話せないので、ちょっと寂しそうでした。

しばらくすると、日本人の子供が来ました。その子は、ポーランド語を話せるので、すぐに子供たちと仲良くなりました。私の子供は、その子を見て、うらやましそうでした。

「公園デビュー」という考え方は、日本人の母親が子供と一緒に公園に出かけ、そこで他の母親と知り合いになることを指します。





2007年度決算書（自2006年10月1日～至2007年9月30日）

単位：円

【収入の部】	予　算	収支・支出済み	内　訳
会　費	250,000	196,680	全額の70%
その他	0	0	銀行利息. 寄付
小　計	250,000	196,680	
繰越金	131,939	131,939	
合　計	381,939	328,619	
【支出の部】			
事業費	100,000	121,582	例会、総会、ピアノコンサート
連絡費	60,000	68,860	ポーレ発送, はがき・切手他
編集費	8,000	29,162	ポーレ制作費，文房具等
会合費	10,000	5,658	運営委員会他
事務費	60,000	0	人件費
予備費	20,000	22,180	灰谷先生を偲ぶ会補助
小　計	258,000	247,442	
繰越金	123,939	81,177	銀行預金:495　郵便局:14050　現金:67232
合　計	381,939	328,619	

2008年度会計予算（案）

単位：円

【収入の部】	前年度決算	予算	内　訳
会　費	196,680	200,000	
その他	0	0	銀行利息. 寄付
小　計	196,680	200,000	
繰越金	131,939	81,177	
合　計	328,619	281,177	
【支出の部】			
事業費	121,582	110,000	例会、総会、ピアノコンサート
連絡費	68,860	60,000	ポーレ発送, はがき・切手他
編集費	29,162	10,000	ポーレ制作費，文房具等
会合費	5,658	20,000	運営委員会他
事務費	0	10,000	人件費
予備費	22,180	20,000	
小　計	247,442	230,000	
繰越金	81,177	51,177	
合　計	328,619	281,177	

二〇〇七年度北海道ポーランド文化協会第二十一回総会が二〇〇七年十一月二十八日（水）午後六時三〇分より北海道情報大学サテライト（中央区北三条西七丁目緑苑ビル四）で開かれました。

議事

Ⅰ　二〇〇八年度事業および決算報告、監査報告

Ⅱ　二〇〇八年度事業計画（案）と予算（案）について

Ⅲ　二〇〇八年度役員について

Ⅳ　その他

懇親会

Ⅰ　二〇〇八年度事業および決算報告、監査報告

《主催事業》

1）第五〇回例会　『秋の午後のショパンコンサート』（二〇〇六年十一月六日、井関楽器ホール、参加者約八〇名）

お話：三浦洋さん、ピアノ演奏：安藤むつみさん、高橋健一郎さん、渡辺卓さん

2）第五十一回例会　料理講習会（二〇〇八年二月十七日、札幌エルプラザ、参加者約二〇名）

講師：エディータ・ジェプカさん

3）第五十二回例会　ポーランドの寺山修司（二〇〇八年六月二十一日、ドラマシアターども、参加者約八〇名）

プロデュース：霜田千代麿さん

《後援事業》

1）映画「敬愛なるベートーヴェン」上映会（二〇〇六年十二月二十三日、シアターキノ、参加者約一〇〇名）

お話：三浦洋さん

2）「二台のピアノによるスラブ音楽の夕べ」（二〇〇八年九月十四日、札幌サンプラザホール）

ピアノ演奏：高橋健一郎他

3）まずるか北海道チャリティコンサート（二〇〇八年九月二十二日、遠藤道子記念音楽館）

ピアノ演奏：遠藤郁子他

《ポーレ発行》　第六十号（二〇〇八年一月三十一日）、第六十一号（二〇〇八年六月十四日）、第六十二号（二〇〇八年九月十日）

《第二〇回総会》　二〇〇六年十一月二十四日北海道情報大学サテライト、参加者約二十五名（運営委員会）　二〇〇八年四月二十六日

《二〇〇八年度決算報告》【別掲資料】をご覧ください。

《監査報告》二〇〇八年十一月二十六日に二〇〇八年度の会計処理について監査を実施したので報告いたします。

Ⅱ　二〇〇八年度事業計画（案）と予算（案）について

《主催事業》

・創立二〇周年記念コンサート・他

《ポーレ発行》　年三回

《第二十二回総会》　二〇〇八年十月頃

《運営委員会》必要に応じて随時開催

《二〇〇八年度予算（案）》【別掲資料】をご覧ください。

Ⅲ　二〇〇八年度役員について

会長・・安藤厚

副会長・・小笠原正明

顧問・・遠藤道子、谷本一之

運営委員・・安藤むつみ・薄井豊美・小笠原正明・柏倉涼子・栗原朋子・越野剛・小林暁子・小林美保・斎田道子・佐々木保子・佐光伸一・霜田千代麿・富山信夫・中島洋・鳴神雅史・灰谷洋子・三浦洋・ラファウ・ジェプカ

ポーレ編集委員・・越野剛・小林美保・佐光伸一・鳴神雅史・ラファウ・ジェプカ

ピアノコンサート企画委員・・安藤むつみ・ウィリアムス美由紀・薄井豊美・片寄ますみ・小林美保・高島真知子・高橋健一郎・田口綾子・本田真紀子・三浦洋

監査委員・・栗原成郎、吉野悦雄

事務局長・・佐光伸一

事務局委員・・ラファウ・ジェプカ

Ⅳ　《その他》

会費の納入はお済みですか？

2007年度（2006年 10 月～2007年 9 月分）

当会は、皆様からの年会費によって運営されています。
上記の年度分の会費の納入を宜しくお願いいたします。

《郵便振替口座》
02740 － 5 － 19735
北海道ポーランド文化協会

普通会員（年　額）　3,000円
維持会員（年額1口）5,000円
学生会員（年額）　1,500円

《会費振込銀行口座》
北洋銀行 大通支店
（普）301-0605084
北海道ポーランド文化協会
事務局長佐光伸一

「ポーレ」編集委員会
越野剛・小林美保・佐光伸一・
鳴神雅史・ラファウ・ジェプカ
Tel/Fax ０１１－７２７－１５２０
〔連絡先〕 佐光

北海道ポーランド文化協会会誌
POLE 第 63 号（2008 年 6 月）

目　次

薄井豊美「[創立 20 周年記念] コンサートを成功裡に終えて」、創立 20 周年記念ピアノコンサート[2008.5.17]開催、三浦洋「プログラムノート」、アダム・ミツキェヴィチ「コンラート・ヴァーレンロット」第４章「祝宴」の「詩人の歌」より、ツィプリアン・カミル・ノルヴィト「フレデリク・ショパン追悼」三浦洋訳 ····· 1
越野剛「ベラルーシの歴史と伝説（２）[バルバラ・ラジヴィルの亡霊]」 ····· 5
エディータ・ジェプカ「ポーランドの道産子（６）」 ····· 6
第 21 回 [2007-2008 年度] 総会報告 [2007.11.28] [新会長に安藤厚さん] ····· 7